仲景書、有傷寒雜病論、金匱要略、玉函經、其論傷寒及雜病、甚詳悉焉、然如要略玉函偽撰已、先生辨之、故不贅也、雖傷寒雜病論獨出于仲景、然叔和撰次之、加以己說、方劑亦雜出、失本色者往往有之、且世遐時移、謬誤錯亂、非復叔和之舊、不可不擇也、後之註家、皆爲牽强附會、不可從也、故先生之敎、其理鑿者、其說迂者、一切不取之、所以求其本色也、學者宜審焉、

〔醫宗仲景考〕傷寒雜病論、金匱要略方論の二書は、其原本一にして、今存る傷寒論は、傷寒雜病論の雜病篇を佚せるもの、金匱要略方論は、その傷寒篇を佚せる物なるが、古今億兆の醫人、その方法に從事して、醫藥の祖典と尊奉するに、其撰者を張機字仲景と傳へ來つれど、史籍にその傳なき事を誰も甚く遺憾に思へるに、此頃その人を考得たり、其はまづ晉書列傳なる、葛洪字稚川の傳に、洪尤好神仙導養之法、從祖玄、吳時學道得仙、號曰葛仙公、以其煉丹秘術授弟子鄭隱、洪就隱學、悉得其法焉、後以師事南海太守上黨鮑玄、玄亦內學、逆占將來、見洪深重之、以女妻洪、洪傳玄業、兼綜練醫術、凡所著撰、皆精覈是非、而才章富贍云々と見え、葛稚川の號を抱朴子と稱へ、是をもて其著せる子書の、內篇外篇を抱朴子と名けたり、今この考中に、其子書と稱するもの、卽その抱朴子を云へり、下に其著撰の目を擧たる中に、金匱藥方百卷、肘後要急方四卷とあり、〇中略中然るに雜應卷に戴霸とあるを、肘後方には仲景と有り、今此を考ふるに、雜應卷に華陀といふ姓名にて記せるを、肘後方序には、元化と云ふ字を書たるに準へ思ふに、仲景といふも、戴霸と云へる人の字とこそ聞えたれ、そは同じ稚川翁の文にして、かく相違ある事は、殊に深く心を止めて考ふべき事なり、華陀が字を元化と云しことは、史傳に見えて、人あまねく知れり、また稚川翁の本傳に、金匱藥方とあるを、雜應卷また肘後方序に玉函方とあり、然れば稚川翁の撰べる百卷の方書は、かく二名を稱し、また二名を合せて、金匱玉函方とも稱して、其金匱てふ名は、戴霸字仲景が方書の古名を用たると聞えたり、そは雜應卷に、戴霸が金匱と云ひ、肘後序には、仲景金匱とあるにて論なし、斯て其方書は、全書今傳はらず、今存る金匱玉函要略といふ書は、其金匱玉函方を、晉末に出たる、王叔和が要略せる書なり、そは其書の始に、晉太醫令王叔和集と有にて所知たり、王叔和は稚川翁より後の人なること、下に委しく論ふを見べし、然